

## 学級経営力を高める教師のアセスメント力の育成

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

原田 純治（長崎大学教育学部）

田中 秀明（長崎大学大学院教育学研究科）

宇田川巧志（長崎大学教育学部附属小学校）

野口 拓哉（長崎大学教育学部附属小学校）

佐藤 弘章（長崎大学教育学部附属中学校）

森 小夜子（長崎大学教育学部附属中学校）

キーワード：学級経営、Q-U、アセスメント、不適応、問題行動、予防

### 1. 現状と課題

現在、大学教育では「教職実践演習」が必修科目として大学4年生時に開講されている。この「教職実践演習」は、平成17年12月の中央教育審議会の中間報告で示された主旨や基本的枠組みを踏まえ、平成18年7月の中央教育審議会答申において提言され制度化されたものである。そこには、教員として求められる4つの事項（1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、2. 社会性や対人関係能力に関する事項、3. 幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項、4. 教科・保育内容等の指導力に関する事項）を含めることが適当であると示されている。このような答申が示された背景として、学級の荒れや不登校の増加、いじめなど様々な問題行動があることは想像に難くない。河村（2011）は、学級経営に関し、「日本の大学の教職過程には、『学級経営』という独立した単位の授業はなく、教師による『学級集団づくり』や『グループアプローチ』の取り組みは衰退していった」と指摘している。また、学校現場においては、多忙感から教師同士の学び合いの機能が失われ学級経営のスキルが伝承しづらくなっていること、学級経営そのものがもつ多様さや複雑さの中で、教師の一つ一つの対応が、学級経営全体に対してどのような作用を及ぼしたかということを検証することが難しくどのような学級経営が良いか悪いかの判断基準があいまいであることなども指摘している。

では、一体どうすればよいのか。確かにどのような学級経営が良いか悪いかの判断基準はあいまいである。指導的な関わりが児童生徒の実態とマッチする学年や学級もあれば、親和的な関わりが児童生徒の実態とマッチする学年や学級もある。まずは、児童生徒の実態を把握して、そこに応じた学級経営を図ることが必要ではないかと考える。そこで、本実践研究では、よりよい学級経営を図るために、まず児童生徒の実態を把握する教師のアセスメント力の育成を目指すことを目的とした。

## 2. 目的

近年、附属学校園においても、対人関係や学習態度など学校生活全般において配慮を要する児童生徒への対応が課題となっている。しかし、教師は、実習や実践研究等、日々の業務に追われる中、一人一人の児童生徒に対応する時間は限られている。そうした中で、日頃の観察や必要に応じた面談に加え、年度の早期にQ-Uを実施し、結果についてのアセスメントを教師自身で行えるよう研修を実施することで、児童生徒の実態把握の促進及び不適応行動の軽減あるいは予防が可能となるのではないかと考えた。

## 3. 方法

期 間：20xx年4月～10月

対 象：附属学校教職員

調査対象 N大教育学部附属小学校 小学生 373人

N大教育学部附属中学校 中学生 360人

内 容：①Q-U理論の基礎を理解する

②Q-Uの学級経営での活用法を知る

③模擬データを活用した学級アセスメントの演習を行う

④当該学年教師間で、実際Q-Uを用いたアセスメントの演習を行う

①～③の講師及びファシリテーターは田中が務めた。

①～③のアドバイザー及び④のファシリテーターは内野が務めた。

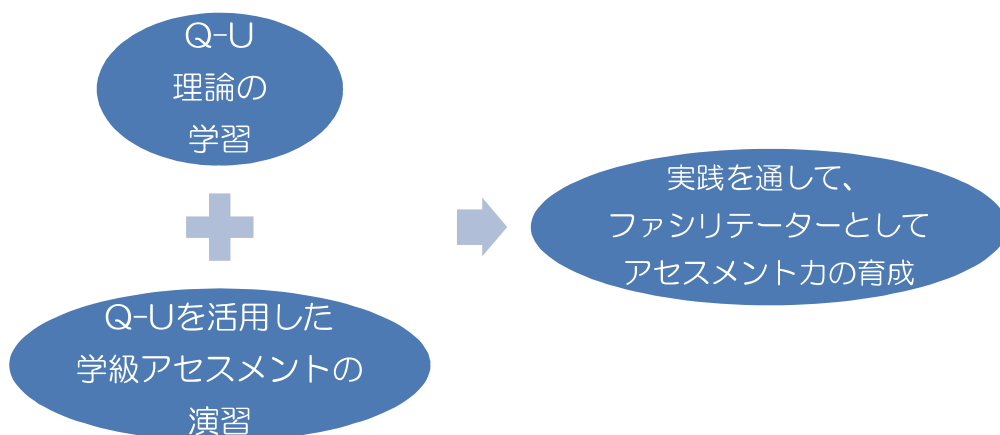


図1 Q-Uを活用したアセスメント力向上の実践の流れ

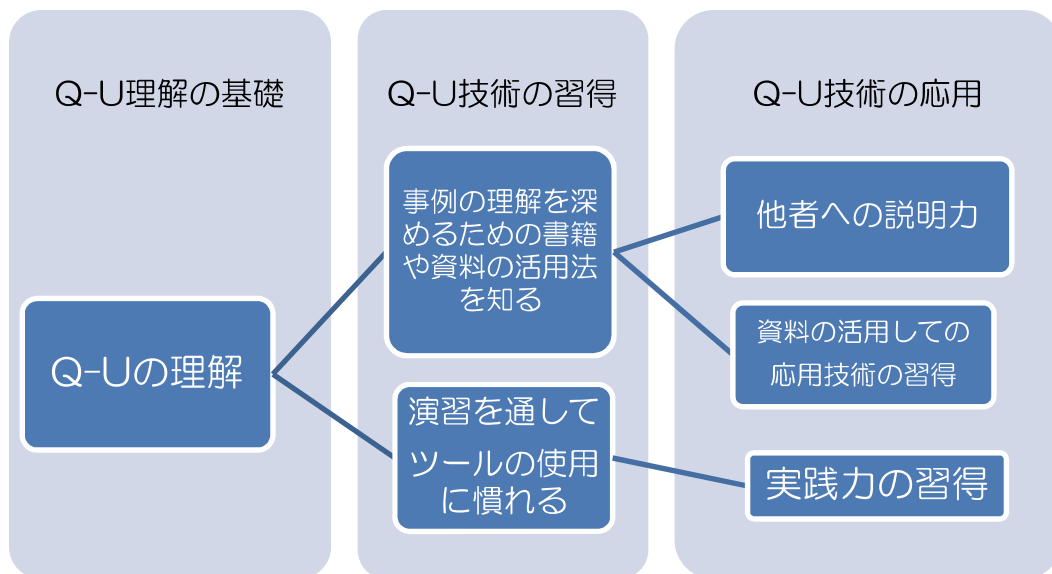


図2 Q-Uを活用したアセスメント向上のための実践の柱

#### 4. 実践

##### (1) Q-Uの理論とは

Q-U (Questionnaire-Utilities) は、1991年から1992年にかけて、連続した生徒のいじめや自殺を背景として河村茂雄氏によって開発に着手された。教師が短時間で実施でき、しかも精度が高い児童生徒のいじめ被害や不適応の子どもを発見するためのスクリーニング尺度として開発され、標準化された現在も進化を続けている。現在は、小学校1年生から3年生を対象とした低学年用、4年生から6年生を対象とした高学年用、中学生用、高校生用が市販されており、専門学校生用が開発されている。また、Q-Uの完成から10年後には、hyper-QUも開発され、学級満足度尺度と学校生活意欲尺度に、新たにソーシャルスキル尺度が加えられた。

Q-Uの理論的背景には、マズローの欲求階層説があり、学級満足度尺度の縦軸は「所属欲求」、横軸は「承認欲求」を表すとされている。河村は、特に中学生の場合は、同年代の仲間間での承認欲求が高まるとし、諸外国のように内戦状態にも飢餓状態にもなく「基本的欲求」や「安全欲求」が満たされた日本の子どもたちは、その欲求の段階が「所属欲求」や「承認欲求」に向かっているとされている。そのため、チェック・リストは「所属欲求」や「承認欲求」に焦点をあてられている。

##### (2) Q-Uの基礎理論やQ-Uを活用した学級経営の具体例を学ぶ

田中が作成したプリントと『集団の発達を促す学級経営』（河村茂雄監修 山谷敬三郎・根田真江編集 図書文化社、2012）などの書籍を用いて2時間ほどの研修を行った。現在、Q-Uに関する書籍は出版されていて入手可能なものが30冊ほどある。それらの書籍の中で、特に学級経営に関する内容の本を用いながら、学級集団の状態を理解するための演習及び研修を行った。

(3) 模擬データを用いた Q-U 理論の演習

模擬事例とプロットをもとにして、K-13法を用いて演習を行った。K-13法で用いられる内容は表1に示す。

方法としては、まず、模擬事例の概要を田中が行い、その後に、それぞれの教師からの質問を受け、事例に関する内容の補充が再び田中により行われた。その後、それぞれが田中からの説明を受けて作成した図表を下に学級の状態について検討を行い、問題点の把握と対応法についてのアイデアが出し合われた。

表1 K-13法の事例提供の内容

| ◇ 学級集団の背景:   | 学校 | 学年 | 人数 | 名(男子 | 名、女子 | 名) |
|--|----|----|----|------|------|----|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校の特徴・・・</li> <li>・ 学級編成の状況(持ち上がり等)・・・</li> </ul>                             |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 問題と感じていること   |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 学級の公的なリーダーの児童・生徒(番号と簡単な説明)   |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 学級で影響力の大きい/影で仕切るような児童・生徒(番号と簡単な説明)   |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 態度や行動が気になる児童・生徒(番号と簡単な説明)  |    |    |    |      |      |    |
| ◇ プロットの位置が教師の日常観察からは疑問に感じる児童・生徒(番号と簡単な説明)  |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 学級内の小グループを形成する児童・生徒(番号と簡単な説明)  |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 4群にプロットされた児童・生徒に共通する特徴   |    |    |    |      |      |    |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 満足群・・・</li> <li>・ 非承認群・・・</li> <li>・ 侵害行為認知群・・・</li> <li>・ 不満足群・・・</li> </ul> |    |    |    |      |      |    |
| ◇ 担任教師の方針  |    |    |    |      |      |    |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学級経営・・・</li> <li>・ 授業の展開・・・</li> </ul>  |    |    |    |      |      |    |

(河村他, 2008) より

この演習は、資料を活用しての Q-U 技術の使用や習得を主な目的としているが、それだけでなく、それぞれの教師の持つアイデアとスキルを持ち寄り話し合う中で、問題の把握や使える資源の発掘などの視点を出し合うことで、解決の糸口を

自ら探り出せることを実感することによる同僚性の深まりもねらいとした。

(4) 該当学年でのファシリテーターをそれぞれの教員が務める

演習は次の方法で行った。それぞれのグループには、①～③の演習に参加した教員がファシリテーターとして参加し、会の進行を務めた。

手順

1. 事例提供者は、Q-Uの結果をもとに表1の資料を用いて学級の様子を整理し発表を行う。
2. 参加者は、事例提供者の発表から学級の問題が発生した要因や、それが現在も続いている要因について考え、できるだけ多くカードに書き出す。
3. 全員のカードを集めて似ている内容ごとに分類し、1枚の画用紙に張り付け、それぞれの画用紙にタイトルをつける。
4. 3の画用紙を重要だと思う順番に並べ、それぞれの理由を発表し参加者全員で意見をまとめる。
5. 対応策について②～④と同様の手順で作業を行う。
6. 各グループでまとめた意見を全体に発表する。

研修は、学年ごとに1学級を取り上げ行われた。問題点を探るということではなく、その問題点から使える資源を探り方向性を見出すということを目的とした。決して、原因探しや犯人探しに留まらぬよう、ファシリテーターを務めた先生方が意識して進行しておられた。そのため、各学年で活発な意見の交換が行われている様子が伺えた。出された内容の主なものは、以下の通りである。

- 学級づくりのテクニック，エンカウンターを活用した学級活動や朝の会・帰りの会の進行
- 多様な価値観を持たせる進路指導の取り組み
- 学習面で不安を抱える生徒への声かけ
- 学級掲示の仕方，座席の工夫
- 生徒同士の交流を促進するためのグループ活動を取り入れた授業の提案など

## 5. 事例についての実態把握及び今後の対応についての検討に関する一事例

(1) A組(1回目)の結果及び考察

A組の学級生活満足度に関するプロットを図3、A組の中で不満足群に属する生徒W、X、Y、Zの学校生活意欲尺度の結果を図4～図7に示す。

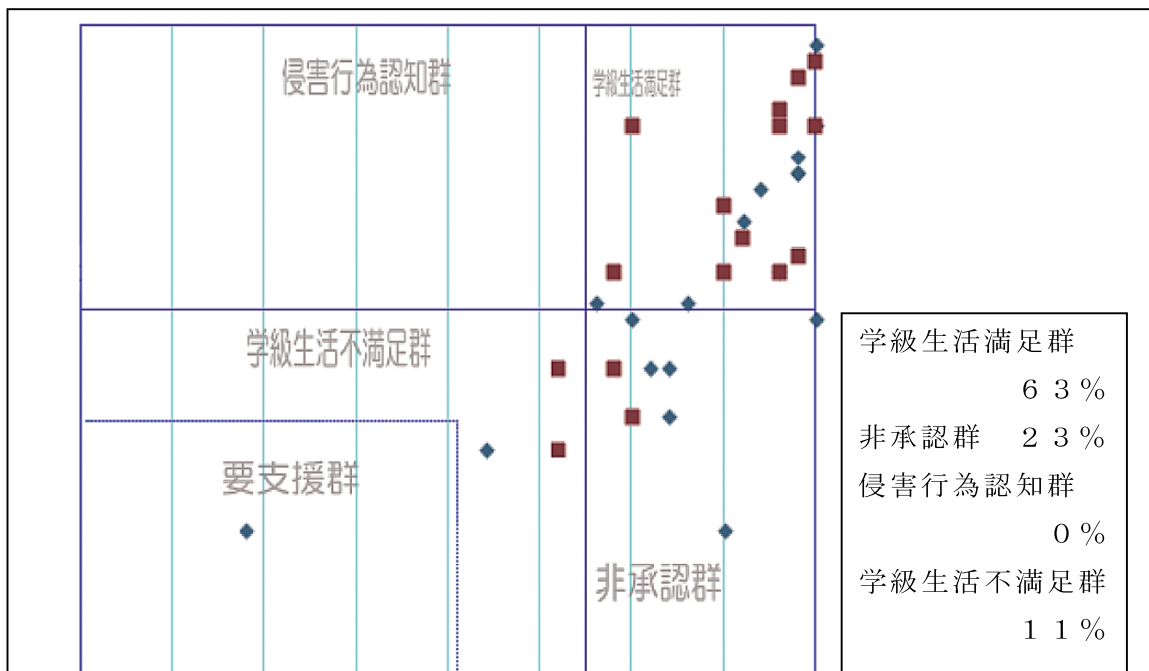


図3 A組 1回目

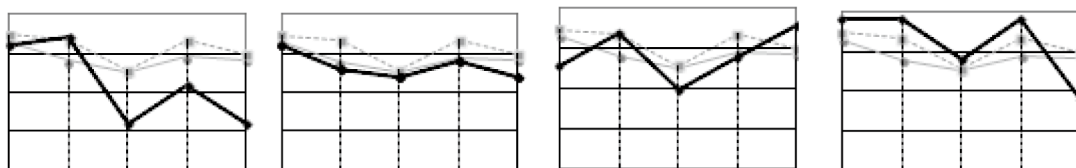


図4 X (1回目) 図5 Y (1回目) 図6 Z (1回目) 図7 W (1回目)

—●— 全国平均    - - - ■ - - - 学級平均    —●— 本人

図4～図7 はそれぞれの学校生活意欲尺度を示したもの。それぞれのグラフの左から、友人との関係・学習意欲・教師との関係・学級との関係・進路意識を示す。なお、図4～図7は、実際の状態を損ねない程度に加工している。

【A組の結果及び考察に関するファシリテーターよりのコメント】

8割を超える生徒が右側に位置しており、ルールの共有化が図られていることが伺える。プロットを見ると、右寄りのグループと軸の中心付近にかたまっているグループが存在しているので、軸の中心付近の子どもたちが、今後、どのように学級の雰囲気を感じていくかが重要なポイントとなるように感じられる。プロットの位置を見ながら、それぞれの生徒の位置や生徒同士の間人間関係を検討しておく、集団としての雰囲気がどちらの方向に引きずられやすいかを見ることが可能となると思われる。

X（学級不満足群）は、前年度も学校生活に関する活動エネルギーが全体的に低く、不安を抱えている様子が見られた、今年度も同様の不安を抱えている様子が伺える。特に進路や教師との関係において不安を抱えている可能性があり、新しい学級に戸惑っているのかもしれない。具体的にどのような事柄に不安を感じているかを拾い上げ、解消を図ることが必要と思われる。

Y（学級不満足群）はXと同様、前年度も学校生活に関する活動エネルギーは低い様子があった。その状態に関しては、今年度は、いくぶん軽減されているように感じられる。しかしながら、学習面や学級集団の中での関係に不安があるようなので、気を使いすぎているか、テストの際の表情はどうか（返却の際も）など、様子を観察していくことが必要と思われる。

Z（学級不満足群）は、学校生活意欲の中では友人との関係や教師との関係が低い。前年度と異なる雰囲気の中で、友だち同士での話題やふるまい方、先生との関係の構築の仕方に関し、不安を感じている可能性がある。

W（学級不満足群）は、学校生活意欲の中で進路意識が低い。まだ、進路に関するイメージが具体的ではないという気持ちの表れかもしれないが、意欲的に勉強を進めているものの希望する進路選択に不安を感じているのかもしれない。自分の不安や不満を上手に人に対して表現できているかどうかを観察していく必要があるように感じられる。

（2）A組（2回目）結果及び考察

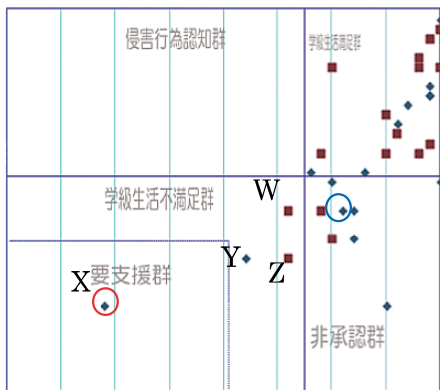


図3 A組 1回目

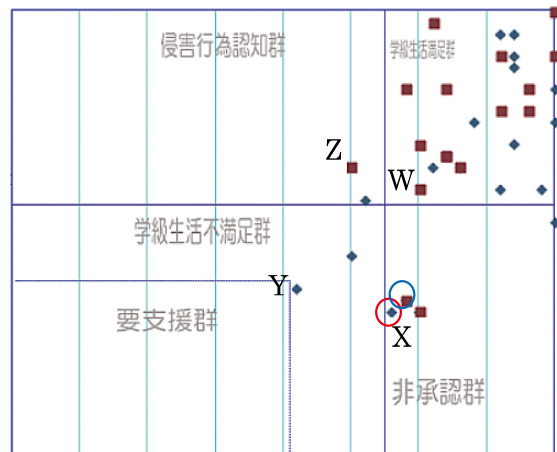


図8 A組 2回目

1回目の実施時に学級不満足群であった4名は、Yには大きな変動が見られなかったものの、他の3名に関しては、それぞれXは非承認群に、Zは侵害行為認知群に、Wは学級満足群に変化していた。それぞれの学校生活意欲尺度を見ると、Xは教師との関係と学級との関係が、Zは教師との関係と友人との関係が、Wは教師との関係と進路意識の得点が増加していることが読み取れる。好ましい変化が見られた3人に共通する点は教師との関係の得点の増加であった。また、変化

のなかった Y に関しては、全体的に減少しており、特に学習への意欲と学級との関係が変化の差が大きい様子が示された。

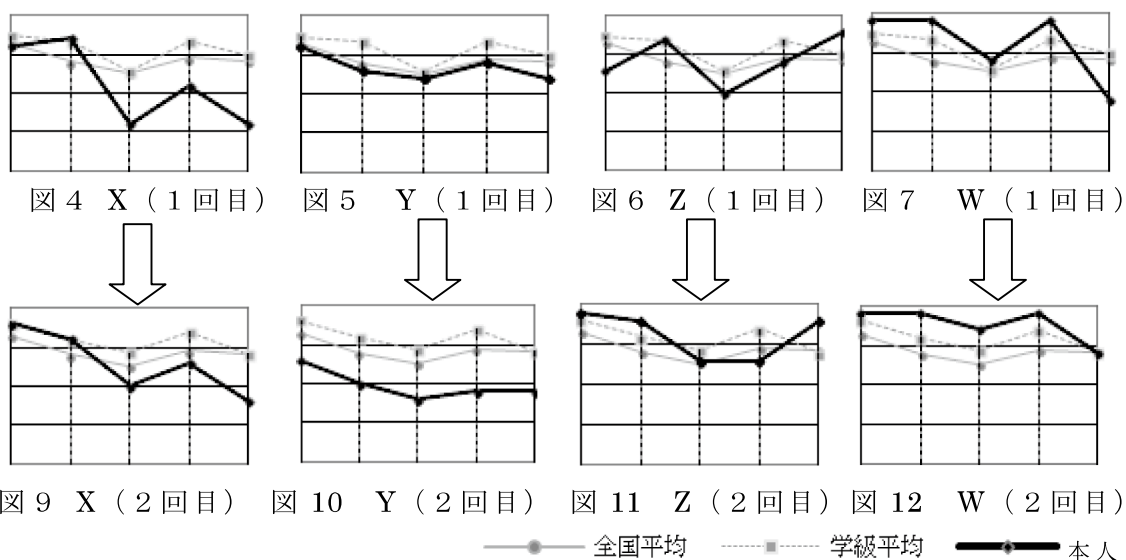


図 9～図 12 はそれぞれの学校生活意欲尺度を示したもの。それぞれのグラフの左から、友人との関係・学習意欲・教師との関係・学級との関係・進路意識を示す。なお、図 9～図 12 は、実際の状態を損ねない程度に加工している。

## 6. おわりに

今回は、Q-Uの結果についてのアセスメント力を育成することで、生徒の実態把握の促進及び不適応行動の軽減あるいは予防につながるような学級経営力をつけることができるのではないかと仮定し、実践を行った。実践はまだ途中で、子どもたちの不適応行動の予防等に関する目に見えての成果は見られないが、Q-Uを活用した研修でのファシリテーターを務める人材を育成することはできた。今後も実践を重ね、長期的な視点で子どもたちに与える効果を検討していきたい。

この実践研究を進めるにあたり、勤務時間外にも関わらず研修に参加して下さった附属学校の先生方や調査に協力していただいた児童生徒の皆様に、心より感謝申し上げます。なお、平成26年度の長崎大学教育学部学部長裁量経費を一部用いた。

## 引用・参考文献

- 石隈利紀 (1999) 学校心理学 誠信書房
- 河村茂雄 (2012) 集団の発達を促す学級経営—中学校 図書文化社
- 河村茂雄 (2012) 学級手段作りのゼロ段階—学級経営力を高める Q-U 式学級  
集団作り入門 図書文化社
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因 教育心理学研究  
vol. 53 No.3 pp.307-319